

短期国際交流における高校生の異文化認知

小池浩子 言語教育講座

1 はじめに

国際的感覚を持った人材を養成する目的で、各地で数多くの国際交流事業が行われている。そのような交流から若者は何を感じ、何を学び取るのであろうか。果して実りのある成果は上がっているのであろうか。ある都道府県で高校生を公募し、いくつかの姉妹都市に短期派遣する事業が行われた。本研究は、日本人の若者が異文化と接するにあたり、文化のどのような部分に注目し、学び取るのかを明らかにする目的で、この交流事業で高校生が認知したことを分析するものである。なお、この交流事業では現地の生徒と日本人生徒をパートナーとして組ませること、相手の家にホームステイすること、学校への通学、見学ツアーなどが計画された。本調査でもこれに呼応して、交流全般に対することがらと、学校について、家庭について、友人関係についてなどについてを調査したが、この報告ではまず第1弾として交流全般についてを扱うことにする。はじめにこの事業の概要を説明し、続いて調査について報告する。

2 交流事業の概要

交流事業の主体は、ある都道府県の国際交流に関わる外郭団体である。姉妹県・州・都市の中からベルリン市（ドイツ）、ニュー・サウス・ウェールズ州（オーストラリア）、北京市（中華人民共和国）、ソウル特別市（大韓民国）、カイロ県（エジプト）の5地域と相互受入、交流を行っている。それぞれの自治体には公募によって選定された日本人の高校生が6人ずつ派遣された。そして翌年には相手方自治体から、日本人の高校生のパートナーとなった生徒を日本に受け入れ、相互交流を実施している。

事前研修

事前研修は、1泊2日の日程で、派遣の1ヶ月ないし2ヶ月前に行われた。派遣先によって出発日が異なるが、研修は合同で行われたものである。その内容は、ビザの取得、海外旅行保険などの実務的な説明、派遣先の文化・生活事情等の講義（派遣先自治体の事情に詳しい職員と派遣者OBによる）、派遣先で学ぶことや言語学習などに関するグループ討議、歓迎会等の出し物についての準備、そして異文化との接触についての学習（講義と体験学習）である。このように、この事前研修は海外渡航に必要な実務的な内容と、渡航先の文化について具体的に学ぶ「文化特定」の学習、それに異文化接触でどのような心の準備が必要かを考える「文化一般」的学習の3つの内容が組み込まれたプログラムである。派遣直前に行われるプログラムではこのような「文化一般」の学習が行われることは比較的困難、あるいは受講者の興味がそれとも言われるが(Hammer, Gudykusnt, & Wiseman, 1978)、筆者の観察によるとこの研修では、大多数の受講者の熱心な参加が見られた。また、OBの経験談や言葉の学習はもっと増やしてほしいとの要望が出された。この2点は帰国後の報告会でも確認されたものである。

交流プログラムの内容

ベルリン市（ドイツ）、ニュー・サウス・ウェールズ州（オーストラリア）、北京市（中華人民共和国）、ソウル特別市（大韓民国）、カイロ県（エジプト）の5地域にそれぞれ6人の日本人高校生と派遣主体の国際交流財団職員が派遣された。派遣期間は2週間である。派遣生には各自現地の同世代の生徒がパートナーとして選定され、日本人高校生は派遣期間中の多くの時間をそのパートナーと供に過ごすと共に、その生徒の家庭にホームステイし、家族との交流も行われた。週末をその家族らと過ごす機会も与えられた。派遣期間中の数日はそのパートナーが通う高等学校相当の学校に通学し、授業に参加した。通学の日数は派遣先によって異なる。これは受入先の諸事情と言語の問題などのためである。ソウルと北京は4日間、ベルリンは5日間、ニュー・サウスウェールズ州は8日間である。また、事業主体の団体の主宰する、市内見学及び近郊への観光も組み込まれた。学校通学の日程の少ない派遣先では代わりにこの比重が高くなった。

この交流プログラムで計画された高校生の体験学習は以下の点にまとめられる。a. 同世代の若者との対人コミュニケーション、b. 同世代の若者を持つ家族の家庭生活の経験、c. 現地の学校への通学経験、d. 学校内外での同世代の複数の若者とのコミュニケーション経験、e. 派遣市内と周辺の名所等の見学、の5点である。

3 研究方法

調査対象者

本調査の対象は国際交流のために世界の5地域に派遣された日本人高校生30人である。有効回答者数は29人。その派遣先の内訳は、ソウル特別市：5人、北京市：6人、カイロ県：6人、ニュー・サウス・ウェールズ州：6人、ベルリン市：6人である。ソウル特別市に派遣された1名からは都合により協力が得られなかった。

調査方法

帰国後に実施された報告会において、質問紙調査を行った。質問は、派遣全般について、学校について、現地の友人関係について、家庭についてに分けられている。今回の分析はこのうち派遣全般についてが対象である。派遣全般に関する質問項目には、どのような文化の違いを認知し、反応したかを問うものと、どのようなことがらに心を動かされたか（情動面）を問うものが含まれている。文化の違いの認知面を問うために、a-1. 派遣先の文化に接し最も驚いたことは何か、a-2. その他に驚いたことは何か、という2種類の質問をした。「驚いた」という用語を用いることによって、高校生が現地に行って改めて鮮明に認識した文化の違いを浮き彫りにしようとしたものである。情動面を問う質問項目は、b-1. 派遣中最も楽しかったことは何か、b-2. その他に楽しかったことは何か、c-1. 派遣中落ち込んだことはあったか、c-2. その理由は何か、である。肯定的方向に心を動かされたできごとと否定的な方向に心が動いたできごとの両面を把握しようとしたものである。なお、「派遣中落ち込んだことはあったか」という質問以外はすべて自由回答式の設問である。

分析方法

a-1の派遣中最も楽しかったことと、a-2のその他に楽しかったことを合わせて、回答数に制限を設けない複数回答として分析することにした。これは、a-1の「派遣先の文化に接し、最も驚いたことは何か」という設問やb-1の「最も楽しかったこと」という質問にも1つだけでなく、複数の内容を回答する人が見られたためである。

各自の回答は内容分析手法を用いてコード分類された。内容分析の手法としては Babbie(1983)と Backstrom & Hursh-César(1981)それにクリッペンドルフ(1992)の自由記述式調査の分析法を参考にした。分析単位は言及単位、つまり「指示対象となっている特定の事物、事象、人物、行為、国、あるいは思想」(クリッペンドルフ、1992)などとした。さらに、細分化されたコードを上位カテゴリーにまとめた。その後、同一コードの回答がどれほどあるか、その割合を有効回答者数を母数にして求めた。

4 調査結果

表1は高校生の、文化の違いに関する認知の分布をまとめたものである。異文化環境において最も多くの高校生が驚きを抱いたのは「交通」に関してである。割合にして半数近い人がこれに言及していたことになる。地域的にはカイロが最も多く6人、北京が3人であるが、共通してさまざまな交通手段が入り乱れて道路を一見無秩序に利用していることが挙げられている。

2番目に多くの人々が指摘したのは「食事」についてである(37.9%)。カイロの3人は昼食や夕食時間が極端に遅いことに驚いたと述べている。その他は食事の内容や食べる量の多さなどである。食事と同等に37.9%の人がローカルの人々の行動特性について言及している。このカテゴリーの多くは対人コミュニケーションに関係する内容である。例えば、「常識・生活習慣・価値観のあまりの違い」や「髪をやたらと触られる」「対人距離の短さ」など非言語コミュニケーションに関することがらである。また、交流をした人の個人特性についてもこのカテゴリーに入れた。例えば、「パートナーの時間や約束にいいかげんなところ」や「積極性のある人が多いこと」「ドイツ人の人柄」「言動の不一致が多いこと」「学校や町(の人々)がのんびりしていること」などである。

表1 文化の違いに関する認知

カテゴリー	人数	%	カテゴリー	人数	%
交通	13	44.8%	外国人への態度	2	6.9%
食事	11	37.9%	衣	2	6.9%
行動特性	11	37.9%	ジェンダー	2	6.9%
住	10	34.5%	文化全般	1	3.4%
生活	6	20.7%	年齢制限	1	3.4%
自然	6	20.7%	時間の守り方	1	3.4%
日本に対する興味・関心	5	17.2%	国民意識	1	3.4%
町	5	17.2%	学生の考え方	1	3.4%
学校の規範	4	13.8%	学校の制度	1	3.4%
政治	3	10.3%	学校の施設	1	3.4%
言語	3	10.3%	家族	1	3.4%
学生の勉強	3	10.3%	なし	1	3.4%
動物	2	6.9%	その他	10	34.5%
社交	2	6.9%	計	109	375.9%

N=29

4番目に多かったカテゴリーは住環境に関する内容で、34.5%であった。このうち、最も目立つ回答は「トイレの汚さ」などトイレにまつわる問題である。これは、どこか特定の派遣先へのコメントで

はなく3地域4人にわたっていた。他は家の広さや豪華さなどである。次いで人々の生活の仕方についてのコメントが20.7%見られた。「貧富の差の大きさ」や「質素な生活」それに「思わぬ現代的な生活（マクドナルド、携帯電話、パソコンなど）」がその内容である。同じく20.7%が「自然」について言及している。ほとんどが「土地が広い」、「景色が美しい」というニュー・サウス・ウェールズ経験者のコメントである。次いで17.2%が日本に対する興味や関心が高い人が多いことを挙げている。同じく派遣先や周辺の「町」についての言及も17.2%であった。町の広さ、隣町まで遠いこと、その現代性や発展性などの内容である。次いで学校の規範に関する内容が13.8%見られた。これは「休み時間にお菓子をたべること」や「調理実習の時、調理中やできあがりとともにいきなり食べ始めること」など自由な行動に驚いたというものが多かった。次に10.3%の人が驚きを感じた項目が3つある。政治に関して、言語にまつわること、そえに学生の勉強である。このうち言語に関しては、「言語の特質そのもの」や、「多言語ができる人々について」などである。学生の勉強については、「授業や勉強への積極性」「現地にも塾や家庭教師が存在すること」に驚いたと述べている。以上が10%以上の生徒が驚きを感じた文化の違いである。

6.9%（2人）がコメントしたカテゴリーが5項目ある。それは「動物について」「社交の仕方や場について」「外国人への態度」「服装について」「ジェンダーについて」であった。このうちジェンダーについての内容は「男性のハイヒール姿」や「男性同士が手をつないでいること」への驚きである。なお、驚いたことがなかったと答えたのは1人のみである。

表2 派遣中楽しかったこと

	内容	人数	割合
人的交流	ホストファミリーとの生活、会話	9	31.0%
	パートナーとの会話・交流	5	17.2%
	ローカルとのふれあい	5	17.2%
	パーティー	5	17.2%
	日本人とローカルの友人	4	13.8%
観光と親睦	観光	7	24.1%
	観光と親睦（ホストファミリーと）	4	13.8%
	観光と親睦（全員）	4	13.8%
	観光と親睦	2	6.9%
	観光（パートナーと）	1	3.4%
	学校への通学与学校でのできごと	9	31.0%
言葉・意思疎通	日本についてや日本語を教えた	4	10.3%
	現地語を教えてもらったこと	1	3.4%
	努力すればコミュニケーション可能とわかった	1	3.4%
食事	食事そのもの	3	10.3%
	食事と会話	1	3.4%
	買い物	3	10.3%
	日本と違うこと、言葉が通じないこと	1	3.4%
	その他：文化の違い以外のこと	6	20.7%
	合計	75	258.6%

表2は心を動かされたことがらのうち、「派遣中楽しかったこと」についての分析結果である。最も多くのコメントがあったのは、派遣先の文化の人々との交流に関することがらであった。内訳は、ホストファミリーとの生活や会話で31.0%を占めた。次いで「パートナーの現地生徒との会話や交流」と、「ローカルの人々とのふれあい」、「ホストファミリーなどが行ったパーティーへの参加」に分類された内容であり、それぞれ17.2%の生徒がこれを挙げている。また、日本人の5人の仲間とローカルの友人の両方を交えた交流が13.8%見られた。

次に楽しかったことがらは「観光」関連である。この中には、単に「観光」とだけ述べた人(24.1%)と「観光と、一緒に観光した人達との親睦とがあいまって楽しかった」という人に分けられた。「ホストファミリーとの観光と親睦」、「日本人とローカルのパートナーら全員との観光と親睦」がそれぞれ13.8%等であった。

3番目に楽しかったと答えた人が多かったカテゴリーは「学校への通学与学校でのできごと」で、31.0%であった。4番目は言葉やコミュニケーション関連で、日本事情や日本語を教える経験をしたことが10.3%などであった。5番目は食事に関することがらである。食事そのものがおいしかったなどと答えた生徒が10.3%、食事とそのときの会話が楽しかったという答えが3.4%である。6番目は買い物で10.3%である。

表3は高校生の国際交流で否定的な情動を感じた対象をまとめたものである。このプログラムの高校生が最も多く落ち込みを感じたのは「自分の英語が自由に使えないことを実感したとき」で33.3%に上った。2位は「日本紹介が十分にできないとき」(11.1%)で、和食をうまく作ることができなかったことも含まれる。その他は「ローカルの(一般の)人々の日本人への態度が良くなかったとき」と「友人とのいさかい」がそれぞれ7.4%であった。また、落ち込んだことはなかったと答えた生徒も9人、33.3%に上った。

表3 否定的な情動を感じたとき

内容	人数	%
自分が英語を自由に使えないこと	9	33.3%
日本紹介が十分にできないこと	3	11.1%
ローカルの人々の日本人への態度	2	7.4%
友人とのいさかい	2	7.4%
ローカルの人が約束を守らない時	1	3.7%
漠然とした不安を感じた	1	3.7%
ローカルの人が途中から話を聞かなくなる事	1	3.7%
食習慣の違い(野菜を食べないこと)	1	3.7%
他	1	3.7%
落ち込みなし	9	33.3%
計	30	111.1%

n=27

5 考察

短期異文化体験から、高校生はどのような文化の違いを認知したのだろうか。今回は高校生が答えやすくするために、直接「どのような違いを感じたか」聞くのではなく、「どのようなことに驚いたか」と質問を投げかけた。すると非常に多岐にわたる項目が浮かび上がってきた。20%以上の人が言

及した項目だけ見ても、交通、食事、ローカルの行動特性、住居、ローカルの人々の生活、自然といった具合である。自然や町の様子や交通など、旅行者でも気づく内容もかなり含まれるが、2週間という短期間の割には、旅行者には分からないであろう人々の生活や行動についてなど、かなり踏みこんだ内容も含まれている。また一部ではあるが考え方の違いをも認知し始める生徒がいたことは興味深い。これは、同世代のパートナーを設定して彼らと彼らの家族との交流を持たせたところによるものがあるであろう。特に日常生活の中に彼らを参加させたことの影響が大きいであろう。文化の違いにも分かりやすい表層部分と、人の心の中のようにすぐにはわかりにくい深層部分があるとはよく言われることであるが（例えば八代，1998），付き合いが深まればそれだけ深層部分の文化が見えてくると思われる。国際交流プログラムの目的は、単に儀礼的な交流ではなく、文化の違いに触れ合っ、見識を広め、行動や考え方のオプションを増やすことに他ならないのであるから、双方が相手の文化により深く触れ、深層部分の違いを認知することが大切であろう。

次に情動面で高校生らがどのような経験をしたのであろうか。異文化に接触し、その文化システムを学習し、必要に応じて自分の行動や考え方を調整する、いわゆる異文化適応の状態はこの情動から窺い知ることができる（Church, 1982）。全体的に見て、高校生達はこの短期の異文化接触において肯定的な情動面を多く報告し、否定的な面は比較的報告数が少ない。落ち込んだことはなかったと答える生徒も3分の1ほどいた。これまでの研究からも、異文化接触の初期には少々高ぶった気持ちになり、何でもよく見えてしまう人が多いことが報告されているように（Lysgaard, 1955），彼らもまた、そのような時期にあったと言えよう。より長期な交流、より深いローカルの人々との関係構築がなされるにつれて、肯定的な情動から否定的な情動へと比重が移る時期もあるはずであるが、このような短期の交流ではそこまでは経験できないのが通常であろう。

今回、情動について調査したもう1つの理由は、より実りのある交流プログラムやそのための事前準備・研修を考える材料にすることにある。肯定的な情動の1つの現れとして「楽しかったこと」は何かを質問した。この側面でも観光や買い物など旅行者的な内容が散見されるが、人との付き合いに関することを楽しかったと報告する生徒が最も多かったことや、観光や食事を挙げた人の多くがそれに「親睦」や「会話」といった言葉を付加しているように、それらのイベントもホストファミリーやローカルの人々とともに行動し、関係が深まったと感じたからこそ「楽しかった」のである。また、これは高校生達が、名所旧跡を訪ねることよりも現地の人との交流することという一番の目的を理解し、自らもそれを求めていたからに相違ない。したがってプログラムの方向性は多くの派遣者が期待していた内容に近かったと言えよう。派遣先によっては名所旧跡観光の比重がやや高めであったところもあった。むしろもっと人的交流の方に重点を移すことを考えてよいのではなかろうか。

負の情動面は「落ち込んだ経験」を尋ねることによって検討した。その答えとして、「自分の英語能力の低さ」を挙げる生徒が多く出たのである。上記の分析からより深い交流を求めている人が多いことがわかったが、そのためには共通のコミュニケーションの手段が必要である。このプログラムではそれを英語という言語に任せている。そこで、「落ち込んだことは何か」という質問に対し、「英語」の問題が挙げられたのであろう。また、「交流」であるから受け入れ側の人々も日本の文化について多々知りたいことがあったであろう。今まで空気のように自然な存在であった日本の文化についてうまく紹介することができずに落ち込む高校生もいたようである。この2つの内容を始めとして、落ち込んだことの多くは、ローカルの人々とのコミュニケーションに関するものである。積極的に交流したい、より健全な関係を築きたいとの思いの現われであろう。負の情動を感じたことがらのうち、派遣生自身の問題に関しては、事前準備をより充実させる必要がある。特に、ローカルの人々との交流

に必要なコミュニケーション能力の養成や自分の文化について意識して学び直すことが必要とされている。ただし、本人達にとっては、自分の準備の不足を実感する機会を得たことで、自分の文化を見つめ直し、身に付けていくための大変良い動機付けになったという面もあろう。

負の情動を感じたことがらには、派遣先の文化をまだよく理解していないための誤解から生じたのではないと思われる内容も含まれる。文化についてはすべてを学習することなど到底不可能であり、常にどのような新規の差異に出会うか分からない。したがってすべてを事前知識として保有することは不可能ではあるが、その文化の主要な価値観や主だった行動特性などは可能な限り認知しておくことが肝要であろう。しかもその指導は、特定文化についてのスキーマ獲得に有効な学習方法をよく理解している専門家が行うことが望ましい。

本調査の対象となった交流プログラムでは、派遣者の選定が公募によるもので、小論文審査等も行われた。そのため、選ばれて派遣された生徒は意識が高い人が多かったと言えよう。そのことが高校生の真剣さ、ローカルの人々との関わりを深めようという動機付けになった可能性が高い。すなわち、他の交流プログラムにおいても、事前準備やプログラムそのものに加えて、交流する人間の意識を高くするための選定方法についても考慮しないと、今回のケースのような結果にはならない可能性もあるだろう。

参考文献

- Church, A. (1982). Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91 (3), 540-572.
- Babbie, E. (1983). *The practice of social research (3rd ed.)*. Belmont, CA.: Wadsworth.
- Backstrom, C. H., & Hursh-Csar, G. (1981). *Survey research (2nd ed.)*. New York: John Wiley & Sons.
- Gudykunst, W. B., & Kim, Y. Y. (1997). *Communicating with strangers: An approach to intercultural communication (3rd ed.)*. New York: McGraw Hill.
- Hammer, M., Gudykunst, W., & Wiseman, R. (1978). Dimensions of intercultural effectiveness. *International Journal of Intercultural Relations*, 2, 382-393.
- Lysgaard, S. (1982) Adjustment in a foreign society: Norwegian Fullbright Grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.
- クリップENDORF, クラウス (1989) 『メッセージ分析の技法：「内容分析」への招待』 三上俊治, 権野信雄, 橋元良明訳。東京：勁草書房
- 八代京子 (1998) 「なぜ今、異文化コミュニケーションか」『異文化トレーニング：ボーダレス社会を生きる』東京：三修社, 11-42.

(2001年5月25日 受理)